

3月8日（日）サムエル記第一27章1～4節

「ダビデは、一緒にいた六百人の者を連れて、ガテの王マオクの子アキシユのところへ渡って行った。」（2節）

ダビデは心の中で「私はいつか、今にサウルの手によって滅ぼされるだろう」と言い、「ペリシテ人の地に逃れるよりほかに道はない」と考えて、ガテの王アキシユのもとへ行きました。なぜそこまでしてサウルの手から逃げようとしたのでしょうか。（1節）もちろん、さまざまな理由があるとは思いますが、私が考えた最も大きな理由は、ダビデと一緒に六百人のともの者たちを連れていて、彼らには家族もいて、（3節）ダビデにも二人の妻がともにいたからであり、（4節）これまで一人でサウルの手から逃れていたのとは、かなり状況が変わってきたということです。

「ダビデは、一緒にいた六百人の者を連れて、ガテの王マオクの子アキシユのところへ渡って行った」とあります。ガテの王アキシユで思い出されるのは、21章10～15節でダビデがサウルから逃れてガテの王アキシユのところへ行った場面です。アキシユは人名のように思えますが、そうではなく、ガテの王を指す称号だろうと思われれます。ですから21章10節以下に出てまいりますガテの王アキシユとここのアキシユは別人だろうと思われれます。前回と異なり、新しいガテの王アキシユはダビデたちを受け入れ、「ダビデとその部下たちは、それぞれ自分の家族とともに、ガテでアキシユのもとに住み」ダビデも二人の妻とそこに住み（3節）もはやサウルによって二度と追われることもなくなりました。ダビデがガテに行ったことについて否定的な見解を述べる人たちもあります。しかし、ダビデがガテの地でアキシユに受け入れられ、そのことによってもはやサウルによって追われることが二度となくなったことを思えば、ここにも主が働いてくださったと考えられるでしょう。むしろ、そのようにして主は「今日、私があなたのいのちを大切にしたように、主は私のいのちを大切に、すべての苦難から私を救い出してください。」（26章24節）とのダビデの信仰に答えてくださったと言えます。主の守りが常にあることを信じましょう。

3月9日（月）サムエル記第一27章5～12節

「ダビデは男も女も生かしてはおかず、ガテに一人も連れて来なかった。『彼らが『ダビデはこういうことをした』と言って、私たちのことを告げるといけない』と思ったからである。ダビデはペリシテ人の地に住んでいる間、いつも、このようなやり方をした。」（11節）

ダビデはアキシユに地方の町の一つの場所を私に下さいと願います。（5節）その日にアキシユはツイクラグをダビデに与えます。

そして8節からは、ツィクラグに定着して以降のダビデの様子を伝えます。ゲシュル人、ゲゼル人、アマレク人は南の方の民族ですが、これらの人々を襲いました。9節で「ダビデはこれらの地方を討つと、男も女も生かしてはおかず、羊、牛、ろば、らくだ、また衣服などを奪って、アキシユのところに帰って来たとありますが、10節でアキシユが「今日は、どこを襲ったのか」と尋ねますと、ダビデはいつも、ユダのネゲブとか、エラフメエル人のネゲブとか、ケニ人のネゲブと答えていました。なぜダビデがそのようにしたのかは、11、12節から明らかです。第一に男も女も生かしておかず、ガテに一人も連れて来なかったのは、生きてガテへ連れて来た者たちがダビデがこういうことをしたと告げて、彼のしていることが分かってしまうといけないからです。そして12節を見ますとガテの王アキシユは、ダビデがイスラエルに属する町を攻撃することでイスラエルに嫌われるようなことをしていると思い、ダビデは完全に自分のしもべになったと信じた。このような策略をめぐらしながら、ダビデは一年四か月の間（7節）ペリシテの地にいたのです。

恐らくダビデはペリシテの地にいる間心が落ち着かなかったことでしょうし、いつの日にか油注がれた者としてサウルに代わってイスラエルの王となる日を夢見ていたことだろうと思います。私たちも世にあつては患難があり、試練があり、苦しみや悲しみがあります。その中であつて私たちは信仰によって主が備えてくださる御国を思い見ながら、永遠の安息に入る日を待ち望んでいます。私たちは世にあつては戦いの連続ですが、御国を待ち望みながら、信仰による忍耐をもって歩ませていただきます。

3月10日（火）サムエル記第一28章1，2節

「では、しもべがどうするか、お分かりになるでしょう。」（2節）

ペリシテ人はイスラエルと戦おうとして、軍隊を召集しました。するとアキシユは「承知してもらいたい。あなたと、あなたの部下は、私と一緒に出陣することになっている。」と言います。ダビデが、ユダの町々を襲ったと偽りの報告をし、その報告を聞いたアキシユが「彼は自分の同胞イスラエル人に、とても憎まれるようなことをしている。彼はいつまでも私のしもべでいるだろう」と考えていたのですから、このアキシユの申し出は当然のことです。それに対してダビデは、アキシユとともに出陣するとも、しないとも答えず、「では、しもべがどうするか、お分かりになるでしょう。」と非常にあいまいな返答をします。しかし、アキシユは、この言葉をダビデがともに出陣する意思表示と受け取り、「では、あなたをいつまでも、私の護衛に任命しておこう。」と言いました。ダビデが、サウルの手から逃れるためとは言え、ペリシテに逃げ、アキシユに取り入ろうとしたからでしょうか、偽りの報告をしたことで、確かにアキシユには気に入られましたが、同胞であるイスラエルと戦うか、ペリシテの地を離れて再びサウルから

逃れる逃避行の日々を繰り返すのかという難しい選択を迫られることとなりました。

私たちも信仰の歩みの中で厳しい状況に置かれることがあります。特に、私たちの信仰にかかわることについては葛藤をおぼえることもあるでしょう。しかし、そのことは私たちにとってはとても大切なことです。もし私たちがいい加減な信仰生活を送るなら、私たちは葛藤をおぼえる必要はないはずです。葛藤をおぼえるということは、それだけ真実な信仰の歩みをしたいと思っている証しだからです。私たちが、そのように信仰をもって歩もうとするなら、主は必ず助けてくださいます。自分で窮地を脱しようともがくのではなく、謙遜に祈りをもって主の助けを祈り求めましょう。主は必ず助けてくださいます。

3月11日(水) サムエル記第一28章3～6節

「サウルは主に伺ったが、主は、夢によっても、ウリムによっても、預言者によってもお答えにならなかった。」(6節)

3節に「サムエルはすでに死に」とありますが、サムエルの死については25章1節にも記されています。恐らくサウルから神のことばを取り次ぐサムエルが取り去られていたことを強調しようとしたものと思われます。「一方、サウルは国内から霊媒や口寄せを追い出していた」とあります。律法においては霊媒が厳しく禁じられています。(レビ記19章31節、20章6節、申命記18章10、11節参照)ですからサウルも律法に従っていたものと思われますし、15章でサムエルのことばに背いて聖絶の物を取っておいたということもありましたが、サムエルの存在はサウルに安心感をもたらしていたので、霊媒や口寄せに頼る必要もなかったのでしょう。

ペリシテ人がシュネムに陣を張りますと、イスラエルもそれに対抗してギルボアに陣を敷きました。「サウルはペリシテ人の陣営を見て恐れ、激しく震えました。」(5節)それでサウルは主に伺いましたが、主は直接的な啓示としての夢によっても、祭司を通して与えられる託宣としてのウリムによっても、預言者を通して主はお答えになりませんでした。私たちも困難な状況だけを見れば、恐れが心に出て来ることもあるでしょう。そのような時に、主の語りかけによって励まされることは、とても大切なことです。しかし、恐れのある時、困ったことが起こって、どうしていいか分からない時などにあわてて主の語りかけを得るために、主に伺いを立てることがありますが、そのように大変な状況に置かれた時だけではなく、日々主と親しく交わり、祈りをもって主に伺いを立て、主からの語りかけをいただくことが大切です。私たち一人ひとは、困った時だけではなく、常に祈りをもってみことばを開き、そこから常に主の語りかけを受け、ただ聞くだけではなく、主のみこころに従っているでしょうか。

3月12日(木) サムエル記第一28章7～10節

「私のために霊媒によって占い、私のために、私が言う人を呼び出してもらいたい。」(8節)

サウルが主に伺っても、主はサウルに答えられなかったので、自分が以前に追い出していた霊媒の女を探して来るように命じます。その命令を受けた家来たちは、ペリシテ人が陣を張っていたシュネムから北東に約7キロ離れたエン・ドルに霊媒する女がいることを報告します。サウルはペリシテ人に見つからないよう、変装して身なりを変え、二人の部下を連れて行きました。そして女のところにやって来て、「私のために霊媒によって占い、私のために、私が言う人を呼び出してもらいたい」と願います。9節で霊媒の女は、変装して身なりを変えて来たのが、まさかサウルだとは思わなかったのでしょうか。誰かが自分を罫にかけて霊媒させ、律法違反の嫌疑をかけて自分を殺させようとしているのではないかと疑います。(9節) それに対してサウルは「このことにより、あなたが咎を負うことは決してない」と主の御名まで出して誓います。

サウルは、ペリシテの陣営を見て恐れ、主からの答えのない状況で、霊媒という神が禁じた罪を犯しました。私たちは、目に見える状況を見て、恐れる時にしばしば罪に陥ることを今日もう一度おぼえたいと思わされます。そして、なぜサウルが恐れたかと申しますと、主に対する信仰が失われてしまっていたからです。私たちも罪により主との関係が正しく保たれなければ、恐れによって心が支配されてしまいます。そのようなことのないように、主との正しい関係の中で歩んでまいりたいと思わされます。そして8節でサウルは「私のために」と二回繰り返して強調しています。つまり、サウルが霊媒を依頼したのは自分のためであり、自分のために行動した結果が霊媒の女のもとへ行くという罪を犯しました。私たちも行動の動機が自分のためという時には気をつけなければなりません。そのような行動が、しばしば罪を犯す入り口になりうるからです。

3月13日(金) サムエル記第一28章11～14節

「サウルは、その人がサムエルであることが分かって、地にひれ伏し、拝した。」(14節)

だれを呼び出しましょうかと尋ねる女に、サウルはサムエルを呼び出してもらいたいと頼みます。サムエルを見て、この女は大声で叫び、自分に伺いを立てているのがサウル王であると気がつきました。恐らくこの女が非常に取り乱しているところを見ますと、恐怖に満ちたものであったことが分かります。それは、生けるまことの神が禁じていた霊媒を通して死人の霊を呼び戻す重い罪を犯すことから来る恐れです。そのような恐れは、神の御前に罪をさばかれるとの思いから来る大きな恐れです。ここで言われている「神々しい」というのは、預言者として

サムエルの持っている権威や尊厳から来た印象です。サウルは、さらに「どのような姿をしているのか」と尋ね、「女が年老いた方が上って来られます。外套を着ておられます」と言った時に、サウルはその人がサムエルだと分かって、地にひれ伏して、彼を拝しました。

サウルは、サムエルから油注ぎを受け、主のことばをサムエルから多く受け取りました。ですから、この危機的状況で頼るべきはサムエルだと思ったのかもしれませんが、しかし、ここで私たちはサウルの二つの間違いに気がつかされます。まず一つ目が、3節で見ましたようにサムエルはすでに亡くなりました。どんなに立派な人物であったとしても、いつかはこの地上の生涯を終える人たちです。ですから、人に頼るのではなく、ここでサウルは悔い改めをもって主なる神に頼るべきでした。二つ目が、サウルは謙遜にサムエルの前にひれ伏し、拝しました。本当は、サムエルの前にひれ伏して拝するのではなく、主の御前にひれ伏して、拝する謙遜さがもしサウルにあれば、ペリシテの陣営を見て恐れ、霊媒の女に頼る罪を犯すようなこともなかったことでしょう。私たちも主の御前に謙遜に歩んでいるでしょうか。

3月14日(土) サムエル記第一28章15～19節

「なぜ、私に尋ねるのか。主はあなたから去り、あなたの敵になられたのに。」(16節)

15節でサウルは「私は困りきっています。」と言います。なぜならペリシテ人が攻めて来るのに、神は私から去っておられ、預言者によっても、夢によっても、サウルに答えられないからです。本来であれば、もっと早く謙遜に主の御前において悔い改めるべきでしたが、そうはしないで、ペリシテ軍が攻めて来てどうにもならなくなってから、預言者サムエルに頼ろうとしても遅いのです。サウルは「神は私から去っておられます。」と言いましたが、サムエルは16節で「主はあなたから去り」と、主ということばを用いています。サウルが主ではなく神という言葉を用いていることから、サウルにとっては主なる神も、まるで単なる神となってしまったかのような印象を受けます。

17節から主は亡くなったサムエルの霊を通して、自分の方法に固執するサウルに最後通牒を突きつけるかのように、みことばを語られます。17節で「主は、私を通して告げられたとおりのことをなされたのだ。」と言います。ですから、サウルも今の自らの状況は自分の罪が招いた主のさばきと受け入れる他なかったのです。「あなたの手から王位をはぎ取って」というのは15章28節の繰り返しですが、そこには名前までは出て来ませんが、17節では「あなたの友ダビデに与えられた」とダビデが次の王であることが明言されています。そして18節でもう一度、主の御声に聞き従わず、アマレクを聖絶しなかったサウルの罪が語られ、この罪のゆえにサウルのもとを主は離れ、主はサウルを厳しく罰せられ、王位も剥奪されたのです。イスラエルは、ペリシテに敗れることになりましたが、それは主がサウルと一緒にイスラエルをペリ

シテ人の手に渡されるからです。このことが19節で二回繰り返されることにより強調されています。そして「明日、あなたもあなたの息子たちも、私と一緒にいるだろう」というのは、殺されることによって、この地上での生涯を終えるということです。

主の語られることは必ず成就します。そして、主は罪に対して厳しくさばかれるお方です。ですから、主が忍耐しておられるうちに悔い改めなければなりません。悔い改めの時は、いつまでも残されているわけではないからです。